

目指すは海と陸を越えたバディ！ —海と陸の危機管理—



ささき ちひろ
佐々木 千寿

(海上保安庁羽田特殊救難隊長)

こもり よういち
小森 陽一

(作家「海猿」原案・取材)

きよつか みつお
清塚 光夫

(元東京消防庁ハイパーレスキュー総括隊長)

司会 これより、海と陸両レスキュー機関の隊長と、両者を長年にわたって取材を続けていらつしやる小森さんを交えてのディスカッションをしていきたいと思っています。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

小森 まず、佐々木隊長は一度特殊救難隊を離れた後、希望して復帰されたとのことですが、そこまでして戻られた理由は何ですか。

佐々木 そもそも海上保安庁には、何か人の役に立つことをやりたいと思って入ったのですが、そういう思いを特殊救難隊の仕事は十分に満たしてくれるからです。

司会 清塚隊長は多くの経験がおりですが、若い世代も育ってきた中、後輩にはどのような指導をなさっていますか。

清塚 「助けを求めている人がそこにいる以上、どんなに困難な現場であつても、そこで自分たちがあきらめるということとは、助けを求めている人の命を隊員自らの手で絶つてしまうことになる。あらゆる手段を使って最後まであきらめないで救助を考えろ」ということを言っています。

特別な指導は行っていないですが、危険な活動現場が多いので、普段の訓練は本

当に厳しくやっています。

司会 小森さんはレスキューの現場をいろいろ取材されていますが、なぜ、レスキューに興味を持たれたのでしょうか。

小森 その前に、今、清塚さんがおつしやつたように、命がかかっている現場に行くので両機関とも訓練は半端ではありません。「海猿」のとき、海上保安大学校に潜水士になるための潜水研修の取材に行きましたが、研修生たちがバタバタと失神しているのです。そこまで自分を追い込んで、「何分何十何秒までなら自分は水の中で冷静に動ける」というのを身体に刻み込むのです。「日本の子どもはどのくらいの」と言われていますが、立派な若い人たちがたくさんいるんだなと思いました。

それは東京消防庁さんに取材させてもらつたときも一緒に、瓦礫に埋もれて

こもり よういち
小森 陽一
作家
「海猿」原案・取材

大阪芸術大学芸術学部映像学科卒業後、東映入社。その後、コラムや小説、漫画原作・映画の原作脚本などを手がける。主なものに「海猿」(小学館「ヤングサンデーコミックス」)、「トッキュー!!」(講談社「週刊少年マガジン」)、「我が名は海師」(小学館「ビッグコミックスピリッツ」)、日本テレビ開局55周年記念映画「252 生存者あり」原作脚本など。

今年7月には、広く海の仕事を知らしめた功績により海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣表彰)受賞。



ハイパーレスキュー隊：震災時や大規模な災害に対処できるよう、高度な救助・救急技術と重機の運転資格などを有する選りすぐりの隊員と震災対策用救助車・特殊救急車・大型重機等の車両で構成され、赤外線スコープや電磁波探査装置などの人命探索機材を備えている。
(写真提供：東京消防庁)



皆川優太くん救助直後の様子（写真提供：東京消防庁）

助ける・助け合う

すごい罵声を浴びて……。それはそうだと思うのです。自分ができなかったら周りの隊員も巻き込みますから。それで、人を助ける仕事というのはすごいな。話が前後しますが、知らなかったから知りたくなって飛び込んで行っただけですが、実際の訓練などを見たから余計に熱くなって、物語が書けたのです。

司会 危機管理と言えば、「自助（自分で助ける）」「共助（互いに助ける）」「公助（公で助ける）」と言いますね。

清塚 われわれの訓練の中でも、自分たち救助隊員がケガをすれば助けられる人も助けられなくなるので、自分たちの命は自分たちで守ることが大前提にあります。まずは自分の安全を確保して、その中で人を助けていかなければいけません。

それから、現場に入ったときは、救助を求めている人にまず救助隊員は必ず声をかけて、不安を和らげてあげるように

しています。ケガをされている人や救助を求めている人はすごく不安なのです。「声かけ」によって不安を少しでも和らげてあげる、みなさんにも声をかける勇氣を持つてもらいたいと思います。そして「声かけ」から、次の機会には手当をしてあげる。そのようにして周りを助けてあげるという気持ちが生まれていくのではないかと思います。

小森 そういう点は海も一緒なのですか。

佐々木 救助に携わる者の根底は全く一緒だと思います。

司会 今年はゲリラ豪雨と言われる異常気象も多くて、海なども大変だったのではないですか。

佐々木 幸いにして台風の上陸は少なかったのですが、われわれは全国各地の海に潜る機会が多いので、海水温が非常に上がっていることを肌で実感しています。南の海ではサンゴが真っ白になっているのを見かけたり、これは世界的にみんなが力を合わせて解決しなければいけない問題だということも感じます。

清塚 東京都豊島区で下水道の作業員の方が流されて亡くなった事故がありました。水深が2倍になると身体に受ける圧力は4倍と、二乗倍になるのです。

「膝ぐらいの深さだから大丈夫だ」と思っているけど、ちょっと深くなると太股ぐらいまでくると簡単に足がすくわれて立ってられないということがありますので、川などに行ったときには注意してください。

海と陸の人命救助の根底

小森 僕は海上保安庁を舞台にした「海猿」「トッキュー!!」、東京消防庁のハイパーレスキュー隊が活躍する「252 生存者あり」を書きましたが、僕の中ではこれらはあまり線引きがなくて、兄弟作品という感じを持っています。陸と海で立場は違うのですが、向かっている方向は一緒で、作品も気持ち重なる部分がたくさん出てきて、あまり切り離しては考えていません。

清塚 光夫

東京消防庁八王子消防署警防課長
消防司令長

今年9月まで東京消防庁第八消防方面本部消防救助機動部隊総括隊長消防司令、通称ハイパーレスキュー隊の総括隊長として従事。2004年の中越地震の際、皆川優太くん救出（写真上）の現場指揮者として救助を完遂。

その活動範囲は多岐に渡り、民家の火事から高速道路での事故、または台風で川に取り残された人の救助まで、人命救助の最前線で陣頭指揮を執り、今も後進の育成に努める。



海上保安庁特殊救難隊：羽田に基地を置き、転覆船からの乗組員の救助、ヘリコプターとの連携による人命救助、危険物積載船舶火災の消火救助など、全国で発生する特殊な海難に対応する海難救助のスペシャリスト。昭和50年の創設以来、救助人員は2000名以上に及ぶ。



平成16年富山県伏木沖海王丸座礁海難において、実習生・乗組員の冷静沈着なる行動のもと167名全員を無事救助

司会 そうですね。小森さんが手がけられたことがきっかけになって、海と陸のレスキュー隊長が揃ってトークする場が実現したのかもしれないですね。

清塚 そうですね。こういう場で海と陸がお話する機会は、多分、過去にはなかったと思いますが、救助のもとをたどってみますと、ともに苦しい1カ月間の救助研修では、海上保安庁、東京消防庁の研修生は同じ汗を流して厳しい訓練に

耐えてきたわけです。私の研修のときも、3名の海上保安官の方と一緒に訓練をやらせていただきました。両者ともとをたどれば同じところにとどろきま

す。つまりは、活動するエリアは海と陸で違いますが、最終目的は「人を助ける」ということなのです。先般の四川地震でも国際緊急援助隊として私たちのハイパーレスキュー隊からも中国に人を送りましたし、海上保安庁からも隊員が一緒に行って活動をともしました。

佐々木 「助けない」という気持ちは人の本能だと思いますので、救助に携わることを誇りに思っ、気持ちの根底のところを受け継いでいくところは一緒です。陸だろうが海だろうが、とにかくわれ

われはスキルを磨き、少しでもいい仕事をしていこうとすることでやっていきたいと思います。

小森 こういう機会ですでお聞きしたいと思うのですが、海のレスキューから見、陸のレスキューの「こんなところはすごいな」、逆に陸のレスキューから見て「海のレスキューのこんなところは真似ができないな、参考にしたいな」とか、そういうところを両隊長さんに伺いたいのですが。

佐々木 部隊や組織が違ったりして、どこを誰がどうすると採めそうなどところもあるのですが、切羽詰まった場面にあうと自然に得意なところが振り分けられるというフレキシブルさといえますか、消防職員の許容の大きさというところ、全国的に決まったやり方でビシッと動けるという組織立った力があるところは非常にうらやましく感じます。今後、われわれもそういうところを真似していかなければいけないと思っています。

清塚 海上保安庁の救難隊の方は特に空からの救助が非常に強いと感じます。山やビルの屋上からのヘリを活用した訓練や救助では、やはり海上保安庁さんから学ぶところがあります。そういう面でお互いが切磋琢磨して、これからのいい関

佐々木 千寿

海上保安庁羽田特殊救難隊長
二等海上保安正

羽田特殊救難隊長として数々の特殊海難に出動。

平成16年富山県伏木沖での帆船「海王丸」座礁海難（写真上）では、救助ヘリから最初に降下を成功させ、本救助ミッションを完遂へと導いた一人。救助のプロでもあると同時に救急救命士の資格をもつ救急のプロでもある。

今後も、人命救助の最前線で指揮を執り続ける。

係でいきいたいと思っています。

小森 本気で体力勝負したら、どちらが勝つでしょうね（笑）。

清塚 やはり海上保安庁じゃないですか（笑）。

佐々木 それぞれ得手不得手というのがあって、それを専門にしているところのほうで絶対に強いので、走るかなどは東京消防庁の方にはとうていかなわないうような気がします。

清塚 でも、基本的には救助隊員というのは臆病ですよ。臆病でないと、多分、この席に立っていられないと思います。皆さんが逃げてくるところにわれわれは入っていかねければならないのですから、「本当にこのまま入って大丈夫なのか」ということを常に考えて行動しています。私もヒーロー漫画をよく見ましたが、われわれはヒーローになつてはいけ



国際緊急援助隊救助チームとして四川地震被災地でともに活動



特殊救難隊とハイパーレスキュー隊員の整列(写真:宮野貴(南アートファイブ))

ないのです。救助隊員がヒーローになるということはどこかで救助を待っている人がいるということですので、本来われわれは静かにしていたほうが、逆に皆さんは幸せなのです。

素晴らしいレスキュー軍団に

清塚 ハイパーレスキュー隊には、「愛」「技」「絆」という3文字があります。「愛」は救助を求めている人に差し伸べ

る愛の手。「技」は、人を助けるために必要な救助技術。そして最後の「絆」は、細いロープ一本で自分たちの命を仲間の隊員に託す気持ちと、「絶対助け出す」という救助する側の気持ちの「絆」です。救助される側の方も「絶対助かる」「生きるのだ」という気持ちを忘れないでいただきたいと思います。

司会 ところで、救助で怖いと思った瞬間はありますか？

清塚 火災現場で「ああ、これでもう俺は終わりかな」と思ったことはありません。そのようなときにも普段やっている

訓練の基本的な部分が出てきて、役に立ったことがあります。

佐々木 私も失敗してひどい目にあったことがあります。それがなくように普段から「常に備えよ」ということで訓練し、準備して、出動時には万全の自信をもって臨むようにしています。それでも自信が足りないときには勇気を持って撤退ということを常に忘れず、そのときどきの判断でやっています。

司会 「人間ははかなくもろい」ということがあります。いざとなるとすごい底力が出ますよね。

佐々木 沈没して二十数時間船の中に閉じ込められて生存していた人がいたり、人の命の強さに感動したりするときもあれば、こんなにあつけないときもありません。そういうところをいつも感じつつ、今生きている時間を精一杯生きようと、われわれが救助現場から励まされるようなことも多くあります。

司会 それでは、まとめとして、小森さんから両機関の隊長に応援のメッセージをお願いいたします。

小森 東京消防庁、海上保安庁と一緒にやる機会はありませんが、僕ら一般の者からすれば、助けてもらいたいと思うのは海上保安庁でも東京消防庁で

も同じなので、どんどんお互いのいいところを吸収し合って切磋琢磨し、素晴らしい日本のレスキュー軍団になっていてほしいと思います。

司会 最後に両隊長から皆さんにメッセージをお願いいたします。

清塚 必ず地震は来ます。われわれは皆さんを助けに行きますが、皆さんは自分を助けるために普段からの備えをしつかりやっていた方がいいと思います。

佐々木 同じような話なのですが、「プロテクトマイセルフ」というわれわれ救助員の合言葉があるのですが、これは一般の方にも言えることだと思つのです。困っている人がいたら手を差し伸べる勇気を持ち、先ほど言った「自助」「共助」「公助」の3つの言葉を覚えておいていただきたいと思います。

司会 今日は、大変貴重なお話をたくさん伺うことができましたが、これをもちましてトークセッションを終らせていただきます。どうもありがとうございました。

これは、危機管理産業展（東京ビッグサイト）にて10月8日に行われたトークセッションの様子を掲載したものです。なお、本セッションに先立ち行われた両レスキュー隊による高さ30mからのリペリング降下の模様は海上保安庁HPの動画配信コーナーからご覧いただけます。